

んの数百メートルを歩くのでさえ、かなりの時間がかかった。ミゾソバを引っぱり出して、閉鎖花ができることを教えてもらい、目から鱗の落ちる思いをした。ミヤマベニシダの鱗片がゴキブリの羽に似ていると言う説明も、印象に残っている。私は学生時代、水草の勉強をしていたのだが、ヒルムシロ属などは、神戸大学の角野先生に標本を送って同定していただいていた。ある時、池上先生から、「教えてもらうのもよいが、自分の力でやりなさい」というような意味のことを言われた。自分の甘えに恥じ入ったと同時に、先生の独立自尊の気概を感じ、尊敬の念を深くした。じねんじょ会の植物調査では、私は先生と一緒に最後尾を歩くことがよくあった。深い山の中ならともかく、田んぼや畑の畦を歩くと、近くの人に怪しまれ、植物を採取するものだから、最悪の場合、二人で一緒に怒られたことも何回かあった。そんな時、先生といえども逃げ出そうとしたことがあったのを思い出すと、ちょっと可笑しくなる。

私が高校教員として新潟市の近くに就職してから、時々、先生を車にお乗せして、じねんじょ会の植物調査に行くこともあった。帰りの別れ際に、先生が植物分野を分担執筆された「菱ヶ岳」の本を頂いたこともある。車の中に何か忘れ物をして、それを先生のお宅まで届けたこともあった。車中で先生はいろいろな話をなされた。あるアメリカ人が日本に来て、「ありがとう」を伝えたい時は「ワニ(アリゲーター)」と言え、と教えられていたのが、うっかり「クロコダイル」と言った、という小話から、アリゲーターとクロコダイルの違いを説明された。「世界的な」という言葉を何回も口にされた。地方にいても、大学や研究所などの学者、研究者という職業になくても、確かな視点と努力があれば、世界的な研究や仕事はできるのだということであった。また、植物は「道楽」であり、学校の仕事をおろそかにしてはいけない、ともおっしゃった。学校に

勤めるものとして、それは今でも肝に銘じている。新潟市の植物資料室にある標本については、年を経る毎に深く心配されていた。新潟のハーバリウムを日本有数の、それこそ「世界的な」ものにする夢を、繰り返し語られた。学名の意義、標本の大切さ、人を育てる重要性、外国のハーバリウムの様子、新潟市の対応など。「新潟では杉とおのこは育たない」と言うことわざも、先生から初めてお聞きした。

私の二校目の勤務先は、佐渡の相川高校であった。奇しくも、旧制の相川中学校にかつて先生もいらした。うろ覚えであるが、博物、農学の担当として、同窓会名簿に先生の名前が載っていたと思う。その他には先生を偲ぶものは何もなかった。校舎も鉄筋であり、当時のものではない。美しい、あるいは厳しい、佐渡の景色を校舎の窓から眺めながら、時折、先生がいらした頃の佐渡、相川はどんな風だったろうかと思った。今より鮎山も町も盛んだったろうか、子どもたちはどうだったろうか、自然や景色は変わらなだろうか。四年間佐渡にいてから下越に戻ったが、年に一度のじねんじょ総会でしか、先生の話を書く機会はなくなった。体が思うようにならなくなる中で、標本やハーバリウム、じねんじょ会のことなど、自分の思いがなかなか人に届かず、さぞかし歯がゆかったらうと思う。先生は音楽もできると人から聞いたことがある。その昔、オルガンを弾きながら、小さい子どもたちと一緒に歌を歌ったのであろうか。そのような情景が、私には妙に思い浮かぶ。ある夏の終わり、私は新潟の海岸の植物を調べていた。日も暮れかかり、少し疲れて、砂丘の真ん中でぼんやりしていると、大きなザックを背負った年配の、それでいてがっしりした体格の男性が、グミ原のどこからか現れ、砂丘をいくつも越えて、ずんずん歩いて行くような、そんな気がした。池上先生には海が似合うと思う。

池上先生有り難うございました 〈むかご 第12巻：2003年から復刻〉

奈良場 正 一

ご一緒させていただいたなかで、矢代川、切齒尾根などがとくに印象に残っています。重いリュックサックを背負い、野帳の記録をしながらも、わざわざ名前を呼んで下さり、懇切丁寧にご指導いただきました。素人の小生のレベルアップを、常に気にかけていただいたような気がしません。

また総会の度に何回も、標本の束をいただきました。これは分布図集記録でよくあった、吉原正秀氏の旧宅(三島町七日市)に愛蔵標本が残っており、ご遺族が役立つようなら使って欲しいと云われ、池上先生のところに運んだ標本の一部で、重複するものを下さったものでした。標本を

挟んだ新聞の余白には、ラベル記載事項が細かい文字で、きちょう面に転写してありました。

自分の標本や資料の整理に忙殺されそうなか、今思うとこれまた感謝の気持ちでいっぱいです。

調査会の担当で、お世話させていただいたときなど、何の変哲もない場所で、すまなく思っていると、終わりにはいつも「あ一面白かった。勉強になった。有り難うございました。」と云われ、それでどんなに救われたか、肩の荷が下りほっとしたものでした。

最後にお会いしたのは、2年前の総会だったと思います。宿題を仰せつかりました。「アサガオとオオイタドリ

で杖を作ってみてください」それと、どういう話しの経緯でそうなったか忘れてしまったが、「ワラビの茎でできないか」とのことでした。

その暮れ、アサガオとオオイタドリはお届けしましたが、ワラビは長さは確保できるものの、強度がとても杖に耐えるものではなく、何本か寄せて束ねても無理ではないかと思われました。故事になにかあるのか、うかつにもその時の話が記憶になく残念でなりません。

杖は自分で使われるのではなく、大量に作って、長岡駅売店などで販売したらどうか、町の特産にならないか、などと語っていられました。

葬儀の折り、志に戴いたギフトカタログのなかに、山や、写真用のストックがあり、因縁話のようですが、つながり

を感じそれを希望して頂戴しました。使うたびに、池上先生の温かいお気持ちを、偲ぶことができればと思っています。

熊流れ事件について(102頁92の写真参照)

池上先生がザイルを伝って徒渉される雄姿を撮影しようとカメラを構えていたら、突然滑ってバランスをくずされた。吃驚してシャッターを押したので写ってしまった。みんながヒヤツとした瞬間でもあり、不謹慎と思い、門外不出にしていまいましたが、じねんじょ12の調査記録にも掲載済みであるし、現場の緊迫した雰囲気わかる唯一の証拠写真と思ひ提供します(奈良場)。(1985.8.7. 苗場山赤湯温泉清津川の出来事)


池上義信先生ありがとうございました

西山邦夫

池上先生には、あらゆる面で多くの事を御指導頂きました。とりわけ文章の書き方についてのお教えには、心より感謝申し上げねばなりません。自信を持って書いた文章でも、原稿用紙が校正で真っ赤になつて返ってきます。その原稿を読み返しますと、正確で理解しやすい巧みな文章に生まれ変わっています。今度こそは大丈夫だろうと思いつつまた、校正をお願いしても、結果は同じで、いつまでたっても上達はしませんでした。先生はよく著名な方の本を読み、その中から文章の構成を学ぶよういっておられました。私は、文章の表現は上手にはなりませんでした。読んでくださる方がこれで分かるだろうか、心ずるようになりました。これは大変な進歩だと思っております。

池上先生はいつまでも私の心の中に生きております。

西山ささ
葉瀬千風 文彦の凍氷
梅と読めむ 流転の岸辺
新 一巻大成 信江の大記
鈴音清湖
藤原和子
合巻三昧 八十六
1996.1.1. 池上義信



西山様
NKH no. 14.
おま
貴館研究報告、オ5号を
おわかつくござい
せんひろに、あつかう
ございまして
辱く御礼
申し上げます
昨年は大へんに
お世話になりました
深く一
感謝いたして
おります。
本年は、禾本、芳華を
徹底的に、御遊覧なおります
Jan. 24 1989
池上義信

